

石見銀山世界遺産登録記念

創作石見銀山神楽台本

金山姫銀山勧請

平成十九年四月 洲浜昌三・作

あらすじ

守護大名・大内氏が統治する石見国遷摩郡佐摩の銀山奉行に仕える大蔵大輔は、銀山の安寧と繁栄を祈願するために石見一の宮である物部神社へ参拝する。

参拝の帰途、石銀に住む金山師の夢物語を聞く。それによると産土神が夢枕に立ち、「銀山の安寧と大盛のため、金山姫命、金山彦命を勧請し仙の山に斎祭れ」という御教えだったという。二人は勧請の旅に発つ。

道中の深い山で姫に水を所望する。その水には毒が入れてあり、二人は死の淵へ。姫と翁は大蟒蛇に変化する。

黄泉の国から二人を救い出したのは物部神社の祭神・宇摩志摩遲命だった。父・饒速日命が天神御親から授かったという「十種の神宝」から八握剣と蛇比礼、そして「ひふみの祓詞」を授かる。

道中また鬼神が襲ってくるが退治し旅をつづける。周防の大内氏の許しを受け、比礼振山へ着き、山頂の佐比売山神社で金山姫命から幣帛を授かる。金山姫命と金山彦命を遷じ祭るため幣帛を奉じ、一路石見銀山、仙の山へと帰路の旅に就く。

注 実際の舞についてはいろいろな観点からの演出があり、

この台本通りとは限らない。登場人物についても同様です。

創作石見銀山神楽 (石見銀山の世界遺産登録を記念して)

金山姫銀山勸請

2007, 4

大蔵大輔・・・守護大名の大内氏が銀山奉行として置いた役名

金山師・・・銀の鉱脈を見つけ発掘し管理する人。山師ともいう。

宇摩志摩遅命・・石見一の宮・物部神社の祭神。物部氏の始祖・饒速日命の子。

翁(深山の鬼神)・・狩人の翁に姿を変えて深山に住んでいるが大蟒蛇に変化し、更に鬼に変化する。八千年の前から深山に棲む鬼神。

嫗(深山の鬼神)・・初めは嫗の姿だが、大蟒蛇、鬼に変化する。

金山姫命・・・鉱山の神様。益田の比礼振山にある佐比売山神社の祭神。

金山彦命と共に石見銀山の仙の山へ勸請する。

掛歌

産土の 神の恵みの大地なり 感謝の祭り 千代に八千代に

大蔵大輔

そもそもこのところに出でたる者は、石見の国は邇摩郡、銀山奉行に
仕え奉る大蔵大輔にて候。わが里は海の幸、山の幸、別けても仙の山
より出ずる白銀に恵まれし国なり。されどそれを恨み妬む鬼神・怨霊
の招きし災難・禍は数を知れず。更に数多の武者・荒くれ者が押し寄
せ、小競合・戦が絶えず、惨禍・苦難は言葉に尽し難し。されば石見

注
台本の最後に、創作意図や言葉の説明を
書いています。

歌

一の宮へ参り、銀山の安寧と大盛を祈願すべく出で発ちし者なり。

舞って物部神社へ参拝。

一の宮 建てる石見のわが里は 美し国なり 佐比売山高く

神社で祈願し、帰る途中で男に出会う

物部神社の祭神・宇摩志摩遲命のご加護の顕現にちがいない。

さてきて、そのところに立ち出でたる御仁は如何なるお方にやららん。

このところに侍りし自らは、佐摩の村・石銀に住居を致す金山師にて候。

何条何事にて候や。

大蔵大輔

金山師

されば慎みて申さん。この大地を鎮め給う産土の神、わが夢枕に立ち
給いて申さく。「うち続く禍を鎮め、白銀の鏈、末代までつづくべく
仙の山に金山姫命 金山彦命を齋迎え祭るべしなり」と。

大蔵大輔

あな尊き神の御教なるかな。さればこれより汝と共に西の京へ赴き
親方様に子細を告げ、尊き神を迎えに出で立たんと思うなり。

金山師

畏まって御供仕り候。

険しい山や深い谷、荒れ狂う海岸の道なき道を行く。

仙の山 鞆の浦廻を後にして いざや目指さん 西の都を

幾度も 越えて行くなり山や谷 魑魅魍魎の 住まう深山を

大蔵大輔

さてもさても、昼なお暗き深山に入りたるものかな。あれなる四阿にて
一休みせんと思うなり。

金山師

畏まって候。

大蔵大輔

やがて粗末な四阿へ着く。幕の内へ向かつて言う。
この所に住居する御仁に申さく。我らは旅人なるが、水を一杯所望致さん。

嫗

これはこれは、いと尊きお方にやあらん。されば粗末な四阿なれど、
しばし旅の草鞋を解き給えやのう。

大蔵大輔、金山師、四阿の中へ。

狩人の嫗、小さな木桶に水を柄杓で汲み入れる。

狩人の翁が出てきて木桶に毒を入れ、やがて退場。

二人で相談して悪巧みをすることを象徴するような舞い。

これなる真清水にて喉を潤し給えやのう。

大蔵大輔

有り難く頂戴仕り候。

水を飲むとやがて二人とも体が痺れてくる。

蟒蛇の姿に変化した嫗、二人に鉾で止めを刺そうとする。

大蔵大輔

あな恐ろしや恐ろしや。真清水に毒を入れ、命を奪わんとは卑怯なり。

金山師

狩人に変化したるは、如何なる鬼神なりや。

名乗らずに無言で 蟒蛇は向かつてくる。

苦し紛れで戦う二人に 蟒蛇は追い詰められ負けそうになる。

そこへ翁の蟒蛇、登場。

大蟒蛇(翁)

おお我はこれ、八千歳の古より、この深山に住む鬼神・大蟒蛇とは

我がことなり。汝ら如何なる宿世の業にやあらん、神聖なる深山の木

を倒し、岩を穿ち、山を崩し、清水を汚し、我らの棲み処を奪わん

となす。憎き敵なれば、一刀両断切り倒し、骨肉を切り刻んで、我ら

禽獣の餌食となさん。

大蔵大輔

なんと、旅人をたぶらかし、生き血を吸う深山の蟒蛇とは汝らのことなるや。我らの使命を果たさぬ内に、汝らが如き畜生に一滴なりとも生き血を与えてなるものか。いざ、尋常に勝負せよ。

蟒蛇と戦うが、体が痺れて思うように動けなくなり倒れる。

意識を失って倒れている二人の枕元に宇摩志摩遅命が立つ。

宇摩志摩遅命の舞い。

宇摩志摩遅命
歌

言霊に 神の威力は宿るなり、言葉の綾で 良くも悪しくも

天津神 授け給いし神宝 ひふみの祓詞 ふるべゆらゆら

宇摩志摩遅命の祓い清めと、ひふみの祓詞で命が蘇る。

大蔵大輔

さてさて有り難や嬉しやな。我らを黄泉の暗闇よりお救いなされしは、如何なる神におわし給うや。

宇摩志摩遅命

命

石見一の宮なる物部神社に鎮まる宇摩志摩遅命なり。 汝ら日頃より

崇敬のこころ厚く、御酒御食種々の味物を供え、御祭をなせし故、ひ

ふみの祓詞を唱えて魂を振り、汝らを生き返らせたるなり。かくも長き

道中なれば如何なる禍やあらん。身を守るため、神宝を授けん。

これなる八握の劍、蛇比礼、我が父・饒速日命が天神御祖より授

けられし「十種の神宝」なり。いざ災難に遭いたる時は「十種」

を唱えて魂を振り、「ひとふたみよ」を唱うべし。

尊き神宝、畏みて頂戴仕り候。

宇摩志摩遅命、舞いながら消える。

大蔵大輔と金山師の金山姫命勧請の旅はつづく。

大蟒蛇が、鬼に変化して追いかけて来る。

鬼

あな心外なり、不覚なり。久方ぶりに獲物を射止め、深山に棲む飢えし者どもに分け与えんと思いに、あな不覚なり、奇怪なり、息吹返し逃げ来るとは如何なることならん。此度は一突きにて止めを射さん。

大蔵大輔

さてさてついに正体を現わしたり。さらばこの宇摩志摩遲命より賜わりし八握劍にて、汝らが積み重ね来し罪を裁き、その生魂をこの深山の土に鎮めん。これより先、産土神の御心のまにまに深山の守り神になるべし。さもなくばたちどころに成敗いたさん。

鬼

なんと小癩こしやうな。手前からこそ、八つ裂きにして、木こつ端はの如く微塵みじんに切り刻み、この深山の肥やしとなさん。

戦いがつづくが、早々と鬼は退治されてしまう。

勧請の旅がつづく。

歌

天津神 恵みの露を垂れ給え 生きとし生ける生魂の上に (「梅の実」より)
言の葉の 葉末にそよぐ人心 生言霊を 夢な忘れそ (「梅の実」より)

何日も旅をして西の京・周防へ行き守護大内氏に報告し更に旅をつづけて

金山姫命を祭る比礼振山のふもとへ着く。

大蔵大輔

はるか彼方に聳ゆるは、金山姫の鎮まり給う比礼振の峯にやあらん。

いざ雲の峯を指して旅を急がんと思ふなり。

畏まつて候。

金山師

歌

何処いずこにや 金山姫はおわすらん 佐比売さひめの山や 比礼振ひれかりの峯
山並みやまなみの 彼方かなたに海を見下ろして いざ着きにけり 姫の御前みまえに

比礼振山の頂上へ着き、佐比売神社の神前へ。

大蔵大輔

これに進み出でたる自らは、佐摩郡、石見銀山奉行に仕え奉る大蔵大輔にて候。我が里の産土神の御教えにより、銀山の禍を鎮め、末永き大盛を授からんため、はるばる罷り越し申し候。

金山姫命

自らは、これなる社に鎮まる金山姫命なり。命懸けの長の旅、いかにも大儀なり。誠の心、しかと受け止めたり。さればこれなる幣帛を授けん。金山彦命ともども、佐比売山神社として、仙の山の頂に齋祭るべし。幾千代までも石見銀山の繁栄と安寧を守り祈らん。

金山彦命、金山姫命を遷じ祭つた幣帛をそれぞれ受け取る。

大蔵大輔

あな嬉し、あな有り難や。尊き幣帛を授け給いし上に、かくも有り難き詔を賜りて、苦難の旅も天にも昇る喜びに変わりて候。されば尊き神の幣帛を奉じたてまつり、これより石見銀山仙の山へ、急ぎ帰らばやと思ふなり。

金山師

畏みて幣帛を守り奉り、帰りのお伴、仕り候。

途中から金山姫は社殿から二人を見送り、消える。

大蔵大輔、金山師、別れの舞いを舞い、軽やかな足取りで帰路につく。

あな嬉し あな喜ばし彦姫の 神を迎えて 峰を越え行く

「山も永かれ 鍵もつづけ 末は鶴亀 五葉松」

『石見銀山大盛の歌』 三夜節の冒頭

明るく伸びやかな歌とともに、心はずむ軽やかでテンポの舞いで終わる

2007・5・1 第3稿 洲浜

2015・2・15 字句修正 洲浜

「金山姫銀山勸請」創作にあたって

洲 浜 昌 三

平成十八年、大田市は仁摩町、温泉津町と合併し、新生大田市が誕生しました。十九年七月には石見銀山が世界遺産に指定されました。

大田市には神楽団が十二社中あるそうですが、石見銀山を素材にした神楽はこれまでにありませんでした。この台本は世界遺産登録を記念して創作したものです。創作時点では、大田市神楽団有志で、記念行事の一環として舞う予定でしたので、それを念頭に置いて書きました。

その後、石見銀山を素材にした『於紅谷』が大屋社中で創作されました。創作神楽は益田や広島県芸北など各地で生まれています。限りなく芝居に近いものもあります。伝統神楽・創作神楽、それぞれ良さがあり特徴があり、一概に善し悪しは論じられません。

しかし、どんな文化や芸能も、時代と共に呼吸していかないと衰退していきます。時代へ安易に迎合するのではなく、伝統のスピリットを尊重し、更にそれを生かすために、表現方法を工夫し創造していく挑戦は貴重です。そういう気持ちでこの台本を創作しました。大田市の伝統芸能に新たな息吹が生まれることを大いに期待しています。

さて今回の創作に当たって、次のことを考え、目標にしました。

- ① 石見銀山の歴史に深く根差し、石見銀山の象徴となる素材で物語を組み立てる。地域の独自性は生かしながら、同時に狭い地域性を越えた普遍性も重視する。
- ② 歴史的背景や事実は歪めないようにし、発展的、象徴的に扱う。神楽は本来、神を讃え、神に捧げるものである。大衆受けする「見せる神楽」も大切だが、本来の性質は失わないようにする。

創作神楽特有のストーリー性やテンポ、意外性は取り入れるが、低俗にならないように神楽としての伝統は保つ。

- ④ 掛歌や和歌は万葉時代からの日本の深い文化であり独特の優雅さがあり、その神楽の品格に大いに影響する。深い意味をできるだけわかりやすい言葉で表現し舞いに生かしたい。

神楽は古事記や日本書紀の神話に基づいて作られたものがほとんどですが、創作神楽には神話に関係のない物語も多い。台本「金山姫銀山勸請」は物部氏の神話、「先代旧事本紀」と石見銀山の歴史を重ねています。物部氏が拝んだ神は自然神で、太陽や月や大地、山川草木禽獣虫魚であったと思われまます。アニミズムは古い原始的な宗教であると一般に解説されていますが、この思想こそ、現代科学文明が生み出した地球や生命の危機を救うという考えもあります。この台本ではその思想を生かしたいと考えました。日本書記などの天孫系の神々ではなく、日本古来の物部の神を中心に据えた神楽は今までありません。そういう意味で石見神楽の伝統を守りながら、独創的な石見銀山神楽になればと考えました。

神楽に詳しい第三者の客観的な批評を受けたいと考えて、この台本は、神楽に関する研究書や著書も多い石見神楽の大家・竹内幸夫先生や、石見神楽の著書や創作もある益田市の矢富巖夫先生にも読んでいただき、一定の評価をいただきました。

次ぎに主な固有名詞の歴史や背景を解説しておきたい。

石見一の宮・物部神社ものべの：社殿の創建は五一三年といわれる。

物部氏の祖神である饒速日命やその子・宇摩志摩遲命を祭った神社は全国にある。物部氏は大伴氏と並ぶ大和政権の豪族で、軍事や祭事を司った。日本古来の神（山川草木など自然に神が宿るといって考え、アニミズム）を信奉し、魂のよみがえりなどを信じた。大和政権の豪族で財政を担当し、仏教を信奉した蘇我氏と対立し、物部守屋は滅ぼされた。大田の物部神社の主神は宇摩志摩遲命でその他に饒速日命や天御中主大神、天照大神を初めたくさんの神が祭られている。大内氏、尼子氏、毛利氏など石見銀山を支配した武将はみな物部神社で戦勝を祈願し寄進している。

産土神…産土とも産土大神ともいう。神社の祝詞（のりと）に「この土地を鎮め給う産土の大神」などと出てくる。その土地の守護神と一般には理解されているが、大地や地球、大八洲という考えもある。

宇摩志摩遲命…物部氏の祖神といわれる饒速日命の子。先代旧事本記には、宇摩志摩遲命が、十種の神宝を使って神武天皇と皇后の心身安鎮を行ったのが宮中における鎮魂祭の起源だと記述されている。

大蔵大輔…雄略天皇の代に作られた「上代の三蔵」の一つ。大蔵大輔、大蔵丞、大蔵少輔があった。大内義興は1434年（永享6年）に石見国守護職に任じられた。義興は仁摩に石見八幡宮を建立したといわれている。1533年（天文2年）大内義隆は石見銀山の吹大工であった吉田与三右衛門を大蔵丞に任命し、弟の吉田籐左衛門に采女丞（うぬめのじょう）という官名を与えた。大蔵大輔は少輔の上で次官、大蔵丞は第三等官である。この神楽では大蔵大輔とした方が音の響きや重厚さがでるので大蔵大輔とした。石見銀山の経理を担当した役職名である。

石見銀山奉行…1533年、大内義隆は銀山を奪回し、飯田石見守と吉田若狭守を銀山奉行として派遣、年に銀100枚を上納させた。この年に、博多の豪商・神谷寿貞は宗丹、慶寿を伴って石見銀山へ入り、初めて銀の現地精錬（灰吹き法）に成功した。（「島根県歴史大年表」）山吹城が築城されたのはこの頃だという説がある。矢滝城は1528年ごろ大内義興が砦として築城している。石見銀山奉行の役所がどこにあったかは不明だが、この神楽では山吹城にあったと考えることにする。

金山姫命、金山彦命…鉾山の神様である。鉾（たたら）を作るところでは金子屋さんと共に祭られる場合が多い。古事記では金山毘売

神、金山毘古神と表記されているが、分かりやすいように姫をつかった。中国から来た漢字を音に当てはめたので、漢字の表記は様々である。古事記の神話では、イザナミ命が黄泉の国から逃げ帰って身を清め、次々と神々を生むが、火の神カグツチを生んで火傷（やけど）で苦しんでいるときにその嘔吐物（たぐり）から生まれたのがこの二神である。鉾山がある所ではほとんど祭られている。

十種の神宝…物部氏の神話を記した「先代旧事本記」の「天孫本紀」に書かれている。物部氏の始祖といわれる饒速日命が天神御祖（あまつかみおや）からさずけられたという。それには「天璽瑞宝十種」（あまつしるしみずたからくさ）と書かれている。

沖津鏡（おきつかがみ）、辺津鏡（へつかがみ）、八握劍（やつかのつるぎ）、生玉（いくたま）、死返玉（まかるかえしのたま）、足玉（たるたま）、道返玉（みちかえしのたま）、蛇比礼（おろちのひれ）、蜂比礼（はちのひれ）、品物之比礼（くさぐさのものひれ）の十種である。

分類すれば、鏡、劍、玉、比礼の四種類である。そのうちの鏡、劍、玉は呼び方は違うが、皇位の印として天皇家に代々伝えられた三種の神器である。物部氏は大和政権に滅ぼされた氏族であるが、神祭り（神事）を司り全国のあちこちに力を持っていたと思える。古代出雲を支配していた氏族も大和政権に屈服させられるが、出雲大社に祭られている大國主命など、古事記に出てくる出雲神話と、物部氏との関係などは不明だが、とても面白い気がする。この神楽では八握劍と蛇比礼を彩物（とりもの）として使った。「比礼」とはいろいろな説があるが、「ひらひらするもの」という意味で布と解釈した。旅をするとき危険が多かったが、この「蛇比礼」を身につけていれば、毒蛇の害を防げたのであろう。

ひふみの祓詞…饒速日命が天神御祖から十種の神宝を授かったときの教えが「布瑠之言」である。それには、「もし痛む所があれば、この十の宝を、一二三四五六七八九十と唱えて振るえ。ゆらゆらと振るえ。そ

うすれば死人も生き返るだろう」という意味のことが書かれている。奈良にある日本の古神道、石上神社（いそのかみ）は物部氏との関係が深いといわれているが、そこにはこの祓詞や十種の神宝が現在も伝わっている。大田の物部神社でも同じ様な神事が受け継がれている。鎮魂法である。

大蟒蛇、深山の鬼神：うわばみ、かがち、のことで大きな蛇。

「かがち」とはホオズキのことで、ホオズキのように大きな目をして赤く輝いていることを示している。山加我知と書いたものもある。八千年（やちとせ）前から深山に棲息している禽獣虫魚のシンボル。神聖な大自然のシンボルとして登場させた。

鬼神（きしん）：死者の靈魂（＝鬼）、天地万物の靈魂、「おにがみ」とも。鬼神（きじん）：人の目に見えず、超人間の自由自在の力を持つもの。荒々しく恐ろしい鬼。悪魔。（新選古語辞典より）鬼は単なる悪者ではなく、人間が恐れて、追い詰めてつくり出した架空の存在である。

比礼振山、佐比売神社、山神社：比礼振峯ともいい、益田市にあり地元では権現山とも呼ばれる。大内義興は永享6年（1434）

ここから仙の山の頂上へ金山彦を勧請している。佐比売山神社とも書く。大森の佐比売神社では一月十一日に全国の山師が集まり盛山祈願祭を盛大に行った。仁摩の輛ヶ浦から海水や魚等を神職が持ち帰り神前に供えた。この神社は山神社とも呼び、1818年（文政元年）火災に遭ったために、山師や組頭、神職などが連名で銀山の役所へ「拝借仕銀子之事」を提出し、十年無利子で銀二十貫を借りて神社を再建したが、その時今の山麓に移転された。大内氏はもちろん、尼子氏や毛利氏もこの神社を崇敬して寄進している。「サヒメ」というのは「小さな姫」という意味で、大陸から雁に乗って姫が各種の種を運んだという伝説がある。益田に「種」という地名も残っている。三瓶山も佐比売山と呼んだが、同じ伝説が残っている。三瓶にも鳥井にも佐比売神社がある。

石見銀山大盛の歌、三夜節：石見銀山に残る最も古い労働歌ではないかと思う。盛山祈願祭でも歌われた。その歌の冒頭を使用した。「鏈」（くさり）とは銀の鉱脈の事で「つる」ともいう。盛山祈願祭では輛ヶ浦から持ち帰った海水を神社の扉に掛けて「腐る」ようにする祭事もあった。輛ヶ浦は灰吹法が導入されるまでは銀鉱石を掘り出し、馬や牛、背負って約七キロの山道を輛が浦まで運んでいた。そこから船で博多へ運び朝鮮で精錬していたという。

この三夜節は博多節の影響を受けていると故石村勝郎氏は記述している。海を隔てて博多と大いに交流があったことを考えると頷けるところがある。

石見銀山大盛の歌（三夜節）

山も永かれ 鏈もつづけ 末は鶴亀五葉の松
さても美事や 切地のさまよ 青氣六万とじ鏈
のむは大黒 歌うは恵比須 酌をとるのは弁財天
チヨイチヨイ サンヤ

邇摩郡、佐摩村、仙の山、石銀：現在の大森は佐摩村と呼ばれていた。今も上佐摩、下佐摩という地名が残っている。1572年、銀山の住人が厳島神社に参拝して残した棟札に「石州床（邇）摩郡左間銀山」とある。ポルトガルの地図や宣教師の日記などにも「sono」「sana」と記述している。「サマ銀」「佐摩銀山」とも呼ばれた。仙の山は銀峯山ともいい37畝、頂上を石銀といい、住宅跡や精錬跡、墓石な、陶器など生活用品も発掘されている。実際は不明だが、人口二十万、百ヶ寺あったという記述もあるくらい今では想像できない鉱山都市であった。仙の山には大小約600の間歩（銀を発掘した穴）がある。銀は中国やポルトガルとの貿易にも貴重だったし、軍資金として重要だった。大内氏、小笠原氏、尼子氏、毛利氏など銀山争奪戦を何度も繰り返した。（2007/5/1）